

被服製作作業とパーソナリティとの関係

瀬戸 房子*・寺田 貴子**

Relationship between Dressmaking and Personality

Fusako SETO and Takako TERADA

1 緒 言

大学や短大の家政系の学科では、被服製作が、被服構成実習という教科のなかで行われている。大学における被服製作は、製作技術を取得するだけでなく、科学的理論を踏まえ、被服の構成を体得的に理解することを目的としている。しかし、時間の限られた授業では、指導は集団的に行われ、各個人に対する指導の時間が少ないために、個人の被服製作技能の差によって製作速度に違いが生じ、また、作品の完成には、数時間から数十時間を要するために、精神的な緊張の持続力や製作作業中の心理状態が作業の能率に影響を及ぼすと考えられる。そのため、個人の性格や製作作業能力を把握し、効果的な個人指導が望まれる。

本研究では、被服構成実習の意義に基づいた効果的な指導をするために、個人のパーソナリティを科学的に把握し、被服製作技能、および製作態度とパーソナリティとの関係を明らかにすることを目的とする。

2 方 法

2.1 被検者

某女子短期大学被服学科に所属している女子短大生のうち、短期大学付属高校より進学し、被服構成実習（洋裁）を受講している女子短大生を対象とした。調査は、昭和58年と昭和61年の2回行い、1回目59名、2回目58名の女子短大生を被検者とした。

2.2 パーソナリティに関する項目の抽出

被検者の性格や作業特性を科学的に把握するために、学校、産業、医療等で、一般に広く用いられる内田クレペリン精神検査を取り上げた。検査は、被服構成実習開講時に、被検者に対して一斉に実施した。検査用紙は、横に並んでいる数字の加算作業を、1分毎に行をかえ、30分間（前期15

* 鹿児島大学教育学部家政科

** 玉木女子短期大学被服学科

分、休憩5分、後期15分間) 行う内田クレペリン精神検査用紙標準型を用いた。検査結果の各行における最終到達点を線で結ぶことによって作業曲線が得られ、曲線の形状と作業量の多寡から性格特性を総合的に判定し、被検者それぞれの性格特性を、仕事へのとりつきがよく、失敗しにくい、勝気で感情状態が変わりやすい・・等の主観的な表現で記述した¹⁾。判定結果より、被検者を高度定型群、定型群、準定型群、非定型群、重度非定型群の5群に分類した。主観的評価以外に、客観的評価として、作業処理能力を表わす作業量、新しい仕事への慣れや作業に対する取り掛かりのよさを表わす初等努力率、意志や感情の変わりやすさを表わす動揺率、の3項目を抽出し、次式により指数化した^{2),3)}。

$$\text{作業量} = \left(\sum_{i=1}^{15} X_{1i} + \sum_{i=1}^{15} X_{2i} \right) / 30 \quad (1)$$

$$\text{初等努力率} = X_{21} / \bar{X}_2 \quad (2)$$

$$\text{動揺率} = (X_{1\max} - X_{1\min}) / \bar{X}_1 \quad (3)$$

ここで、 X_{1i} 、 X_{2i} は、前期、後期における*i*行目の作業量、 \bar{X}_1 は前期平均作業量、 \bar{X}_2 は後期平均作業量、 $X_{1\max}$ は前期最大作業量、 $X_{1\min}$ は前期最小作業量とする。

また、高校学業成績が、行動の一発現形態であり、知能だけではなく、パーソナリティの複雑性に相応して規定されるということから⁴⁾、パーソナリティに関する項目と考え、理解力、応用力、意志力の指標として、高校学業成績を取り上げた。高校学業成績は短大出願時に提出された成績調査書の評定平均値で表された国語、数学、英語、家庭科、全教科平均を用いた。

2.3 被服製作技能に関する評価

短大において開講されている被服構成実習(洋裁)の成績と国家試験洋裁技能検定(婦人子供注文服製作作業の技能五輪)の成績を用いた。

被服構成実習は、週1度、135分間行われ、ブラウスとスカートを、教師の指導を受けながら、製図から仕上げまで15週で製作する。製作品のデザイン、素材の選択等は限定されていない。被服構成実習の成績は、実習を担当している教師によって、出席状況、授業態度を考慮の上、製作品の出来栄えについて評価される。

技能検定は、オーバーブラウスを、独力で、縫製から仕上げまで、8時間以内に製作するもので、ブラウスのデザイン、素材は、限定されている。その製作品の出来栄えが、洋裁の専門家である技能検定審査員5名によって評価される。

2.4 抽出項目の有効性の検討

被服製作技能の高低が、パーソナリティの客観的評価として抽出した内田クレペリン精神検査による作業特性、および高校学業成績によって説明できるかどうかを検討するために、被服製作技能の評価値と作業特性、及び高校学業成績との相関係数を求め、その有意性を調べた。

また、内田クレペリン精神検査によって得られた総合的な性格特性が、被服製作作業中に実際に観察される個人の作業特性や性格、および被服製作作業中の心理状態を表現し、製作作業態度を予測するための資料として有効であるかどうかを調べるために、アンケート調査を、表1に示した被服構成実習担当の教師5名に対して行った。アンケートには、内田クレペリン精神検査より得られた性格特性が、被検者個々について、主観的表現で詳細に記述されており、その記述内容が実習中に実際に観察される性格や作業態度とどの程度一致しているかを問うものである。その一致度が、1全く一致しない、2あまり一致しない、3どちらともいえない、4よく一致する、5極めて一致するの5段階評価によって、1から5までの数値で表わされた。

表1 教師の担当科目と指導経験年数

教師	担当科目	指導経験
A	和裁	10年
B	和裁	15年
C	洋裁	12年
D	洋裁	6年
E	洋裁	3年

アンケートには、内田クレペリン精神検査より得られた性格特性が、被検者個々について、主観的表現で詳細に記述されており、その記述内容が実習中に実際に観察される性格や作業態度とどの程度一致しているかを問うものである。その一致度が、1全く一致しない、2あまり一致しない、3どちらともいえない、4よく一致する、5極めて一致するの5段階評価によって、1から5までの数値で表わされた。

3 結果と考察

3.1 被検者群の総合的性格特性の特徴

対象とした被検者の総合的性格特性によって分類した群別の比率を図1に示している。

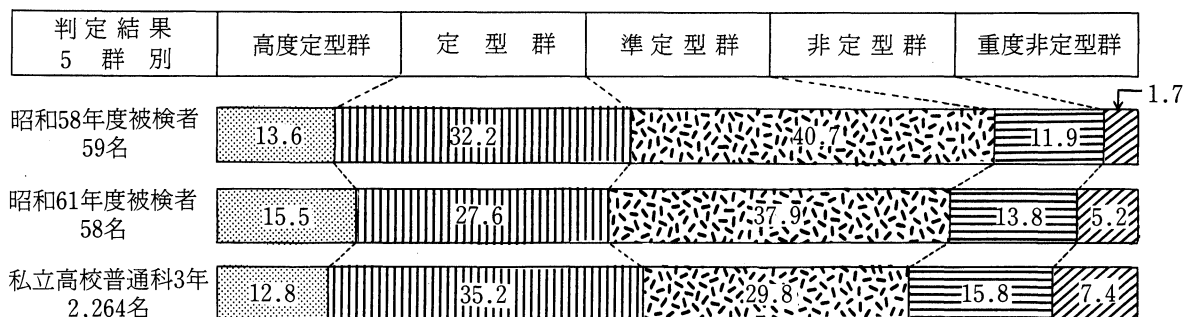


図1. 性格特性群別の比率

昭和61年度の被検者群は、非定型群、重度非定型群の比率が昭和58年度群に比べ、幾分多くなっているが、5群の割合は、ほぼ同様の傾向を示している。被検者が、私立短大付属高校より入学したすぐの学生であるため、全国の私立高校3年の資料¹⁾と比較すると、本研究の被検者は、準定型群の割合が大きく、非定型群、重度非定型群の占める割合が小さいことがわかる。

3.2 被服製作技能とパーソナリティに関する客観的評価

本被検者においても、中塚が指摘するように、客観的に指数化された作業特性が、高校学業成績の規定要因として有効である⁴⁾かどうかを検討するために、作業特性と高校学業成績との相関係数を求め、表2に示した。作業の処理能力を表す作業量は、全教科とも、有意水準5%で有意な相関

表2 作業特性と学業成績との相関

項 目	S58年度調査 (N=59)			S61年度調査 (N=58)		
	作業量	初頭努力率	動揺率	作業量	初頭努力率	動揺率
国 語	0.39**	0.11	-0.53**	0.32*	0.11	-0.06
数 学	0.47**	0.12	-0.50**	0.51**	-0.01	-0.25
英 語	0.46**	0.10	-0.50**	0.46**	0.11	-0.26*
家 庭 科	0.26*	0.09	-0.47**	0.36**	-0.15	-0.11
全教科平均	0.31*	0.15	-0.50**	0.45**	-0.01	-0.19

**, P<0.01 * , P<0.05

を示し、作業量が、高校学業成績の規定要因の1つとなっていることがわかる。このことは、中塚の研究結果と一致している。作業量と学業成績との関係は、2回の調査とも、数学との相関が高く、次いで、英語と高い相関を示している。これは、内田クレペリン精神検査が、数学的方法によって行われることに依存すると考えられ、英語と数学とが同値を示すことは、英語が記号能力の形成を目指し、その学習過程が記号を表現化する教科であるためと思われる。意志や感情の変わりやすさを表す動揺率は、昭和58年度の調査では、高校学業成績と高い相関を示したが、昭和61年度の調査では、有意な相関が認められなかった。しかし、動揺率と高校学業成績が、負の相関を示していることから、意志や感情の安定した者が成績がよい事がわかる。

被服構成実習の成績と作業特性および高校学業成績との相関係数を表3に示す。被服構成実習の成績は、作業特性とよりも、高校学業成績と高い相関を示した。特に、数学、全教科平均との相関が高く、被服製作技能の高低には、理解力、応用力、および総合的な学力が影響する事を示唆している。家庭科が他教科に比べ、相関が低いことは、高校の家庭科が、衣食住、保育、技術等を含み、その評価が複雑であるためと考えられる。作業特性については、昭和58年度の調査では、作業処理能力が高く、仕事への取り掛かりがよく、情緒の安定しているものが、被服構成実習の成績がよいという傾向が認められるが、昭和

表3 被服構成実習の成績と抽出項目との相関

項 目	S58年度調査 (N=59)	S61年度調査 (N=58)
国 語	0.70**	0.42**
数 学	0.80**	0.57**
英 語	0.62**	0.27*
家 庭 科	0.50**	0.47**
全教科平均	0.71**	0.55**
作 業 量	0.61**	0.24
初頭努力率	0.33*	-0.20
動 揺 率	-0.39**	0.06

**, P<0.01 * , P<0.05

表4 被服構成実習の成績と技能検定の成績との相関係数の比較 (N=21)

項 目	被服構成実習	技能検定
国 語	0.44*	0.49*
数 学	0.45*	0.67**
英 語	0.11	0.50*
家 庭 科	0.68**	0.69**
全教科平均	0.56**	0.76**
作 業 量	0.08	0.19
初頭努力率	-0.22	0.15
動 揺 率	0.38	-0.15

**, P<0.01 * , P<0.05

61年度の調査では、その傾向は、認められなかった。

被服構成実習が製作作業中に教師の助言が与えられるに対し、技能検定は、個人の持つ被服製作技能を生かして作業を進め、その評価は、複数の審査員によって判定されたものであることから、個人の持つ被服製作技能を、被服構成実習の成績よりも明確に表わしていると思われる。そこで、技能検定の成績と作業特性、および高校学業成績との関係について調べた。技能検定を受検した学生は、昭和61年度の被検者58名のうちの21名で、表4に示すように、被服構成実習の成績については、家庭科との相関の高い群である。この群に関して、技能検定の成績と高校学業成績との関係は、全教科平均との相関が高く、次いで、数学、英語、国語の基礎教科との相関が高いことから、被服製作技能には、総合的な知識、応用力、理解力などが必要であることが確かめられた。しかし、作業特性との相関は認められなかった。

3.3 被服製作態度と主観的性格特性

表5 総合判定結果と教師評価との一致度

群	被検者	評 価					平 均		標 準 偏 差	
		A	B	C	D	E	個人	群	個人	群
高度定型群	32	4	4	5	4	4	4.2		0.40	0.48
	33	5	4	5	5	5	4.8		0.40	
	2	2	4	4	4	4	3.6	4.2	0.80	
	34	5	5	5	5	5	5.0		0.00	
	7	3	4	2	4	4	3.4		0.80	
定型群	17	5	4	4	4	5	4.4		0.41	0.52
	37	4	4	3	5	4	4.0	4.2	0.63	
準定型群	11	3	3	3	4	4	3.4		0.75	0.52
	42	4	4	4	5	5	4.4		0.49	
	28	5	5	5	5	5	5.0		0.00	
	30	5	5	5	4	4	4.6	4.1	0.49	
	24	4	3	4	4	4	3.8		0.40	
	25	5	5	4	5	5	4.8		0.40	
	12	2	4	2	3	4	3.0		0.89	
	27	2	3	3	4	4	3.2		0.75	
非定型群	36	2	4	3	5	5	3.8		0.84	0.62
	22	4	4	4	5	5	4.4		0.38	
	16	2	4	4	4	5	3.8	4.1	0.98	
	26	4	4	5	4	4	4.2		0.40	
	41	4	4	3	4	5	4.0		0.63	
	18	4	4	5	5	5	4.6		0.49	
平均		3.7	4.0	3.9	4.4	4.5	4.1		0.54	

1…全く一致しない

2…あまり一致しない

3…どちらともいえない

4…よく一致する

5…極めてよく一致する

内田クレペリン精神検査による総合的性格判定と製作作業を通して観察される性格との一致度について、総合判定結果の高い被検者の順に表5に示している。総合判定の高い群ほど内田クレペリン精神検査による性格判定と実際の性格とが一致していると評価され、教師間の評価値のばらつきも少ない。これは、内田クレペリン精神検査の処理能力の高いものは、洋裁、和裁の教科を問わず、実際の被服製作作業の処理能力が高いことを示唆している。各群の評価値の平均は4.1以上で、総体的に、内田クレペリン精神検査の総合判定によって、個人の性格や作業態度を予測することが可能であり、パーソナリティを把握する方法として有効であることがわかった。

4 結 語

大学における技能教科の意義に基づいた効果的な指導をするために、個人のパーソナリティを科学的に把握することを試みた。

個人のパーソナリティを把握する資料として、内田クレペリン精神検査と高校学業成績を取り上げた。高校学業成績、および内田クレペリン精神検査によって得られる客観評価と主観評価について、被服製作技能、および製作態度との関係を調べた。

高校学業成績との関係から、被服製作作業には理解力、応用力などが反映され、総合的な知識が必要であることを明らかにした。

内田クレペリン精神検査の客観的評価との関係から、意志や感情の安定しているものは、教科を問わず作業処理能力が優れていることがわかった。また、主観的評価によって、個人の性格や作業中の心理状態、および作業態度をかなり正確に予測できることがわかった。

これらのことから、内田クレペリン精神検査と高校学業成績が、被服製作技能や製作態度を予測する方法として有効であり、被服構成実習の効果的な指導を行うための資料となることを確かめた。

参 考 文 献

- 1) 外岡豊彦：内田クレペリン精神検査基礎テキスト，日本精神技術研究所（1981）
- 2) 横田象一郎：クレペリン精神作業検査解説，金子書房（1970）
- 3) 柏木繁男：内田クレペリンにおける解析的評価法，金子書房（1975）
- 4) 中塚善次郎：教育心理学研究 18, 1（1970）